

2014年2月3日

日本経営倫理学会理念哲学研究部会発表

仏教とキリスト教の倫理上から見た比較

辻井 清吾

1. 初めに

仏教における宗教倫理上の実践徳目について、人間関係の第一の項目は「慈悲」であり、キリスト教における同様の第一の項目は、「愛」である。このような仏教的慈悲とキリスト教的愛について概要したい。

2. 仏教における「慈悲」について

仏教は「慈悲の宗教」と言われる。他のインド国内の宗教、ジャイナ教でも「あわれみの教法」を説く。バラモンも釈尊に「法とは一切の生きとし生ける者に対するあわれみである」と説く。語義としては、「慈」と「悲」は別である。「慈」(maitri)とはすべての人々に友情を持ち、真実の友情、純粋の親愛の念を意味し、「悲」(karuna)とは、「同情」「やさしさ」「なさけ」を意味する。原始仏教では、慈悲とは、愛が純粋化されたものである。

釈尊は「一切の生きとし生けるものを愛せよ」と強調し、たとえ微小なる一匹の虫けらといえども慈くしみなければならぬ、いわば、「無量の慈しみ」である。その為の奉仕は、単に教法を説くと共に、道を求める人は如何なる苦痛をも堪え忍び、物を与えて奉仕せねばならぬ。慈しみは無量であらねばならぬ。慈悲の実践とは、差別に則した無差別の実現であり、慈悲の倫理は、「自他不二」の倫理である。天台宗は実践的利他的行為を可能にする根底としての理は「自他不二」であり、「機に随って他を利する」が成立する。華嚴宗では「一即一切、一切即一」を説き、その教えは、禅宗に継承され、道元は「自他一如」を強調し、「自他おなじく利する成り」という。鈴木正三は「自他無差別と知るは理也。慈悲心を専とするは義也。それは物我一体といへり、全く隔つべからず。何れの人も、我等が身を愛するが如くなるべしと知るべし」という。利他行としての社会的実践に努める場合は、近代西洋における、個人としての他人を絶対他者と意識してそれに働きかけるという意識を以ていたのではなく、むしろ自己と他人とが一体し、不二になるという意識をもって為された。『大般涅槃経』において、慈悲に三種の慈悲(衆生縁・法縁・無縁)があると説かれ、親鸞も同様に区別する。(別表6. 7) 現実の各宗派の行為と慈悲については、(別表8)で展開する。

慈悲とは自己を捨てて全面的に他の個的存在のために奉仕する事である。それは、現実の人間にとっては容易に或いは永久に実現されがたいことであるが、人間の行為に対する至上の命法として実行が要請される。我々の生活に則して考えれば、或る一人の他人を極度に憎悪しているとすれば、その限りにおいて我々の憎悪さるべき存在が否定され、眼に見えぬ本来の人格がこの我(自身)と向き合う事になれば、そこには対立がなく、憎悪の感も消失するであろう。ここに愛憎を超えた慈悲が実現されるのである。慈悲の実践をなす人は「自分は慈悲を行っているのだ」と高ぶった、とらわれた心があるならば、それはまだ真の慈悲に至っていないのである。慈悲の実践は慈悲の実践という意識を超えたところに現われるものであり、慈悲の実践はまた愛のかたちをとって現われ、普遍的な無差別の愛となるべきである。「博愛」は、西洋の Philanthropy の訳であるが、浄土教の根本経典である『大無量寿経』では、「聖を尊び善を敬い仁愛ありて博く愛せよ」と説き、禅宗で

も「衆を愛する」とも強調する。他人を献身的に愛する事は、他人の苦しみをおのが身に引き受ける事に至って極まり、かかる意味の慈悲行の実践者は『他人の苦しみを苦しむ人』で独語 Mitleid と対応する。英語で vicarious atonement という。西洋の宗教では神の愛を通じて人間を愛するが、原始仏教の立場では絶対者の媒介を考えていない。ロマン・ローランの批評には、現代の多くは賛成すると思われよう。(別表9)

3. キリスト教における「愛」について

キリスト教徒が「愛」について、説き、実践する場合、広範に伝統として教徒に、礎とされる教えは、新約聖書「コリント人への第一の手紙」第一三章1-13と新約聖書「ローマ人への手紙」第一三章8-10におけるパウロの教えである。(別表1-2) また、新約聖書「ローマ人への手紙」第一三章8-10においてもパウロの教えが説かれている。

「コリント人への第一の手紙」第一三章1-13においては、本文が、教徒の実践を支える前提と云える言葉が説かれ、あらゆる義しき実践の源泉がある。愛を負うのみが、如何なる義務を負う必要はないとさえ説く。「ローマ人への手紙」第一三章8-10では、愛が律法の完全であり、宗教的实践の総括であり、故に愛の实践の他、何も思う必要はないのである。義務として、愛以外にはなにも負う必要はないのである。と、パウロは度々強調している。

そのパウロは、イエス・キリストにその考え方を負っていた。イエスは、新約聖書「マルコによる福音書」第一二章28-31にて説く。(別表3) 特に31「次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」は教徒でなくとも広く知られる衆知の教えである。このイエスの言葉は、旧約聖書により語られたものである。第一の戒めは旧約聖書「申命記」第六章4「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」5「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」、第二の戒めは、旧約聖書「レビ記」第一九章18「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。」イエスの言葉に対して律法学者は、新約聖書「マルコによる福音書」第一二章32-35(別表4)にて、イエスの言葉を肯定し、その後、誰も、イエスの言葉に問いかける者はなかった。と、「マルコによる福音書」は記す。旧約聖書に説くイスラエルには、宗教上の実践には、燔祭、犠牲、割札等、年を経るにつて煩雑を極めた。イエスはそのような状態の中で、愛のみを説き、神を愛し、人を愛する。新約聖書「マタイによる福音書」第二二章34-40(別表5)にて40「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっている。」と説く。パウロが、「愛は律法の完全なり」と述べ、愛を負う他はなにも人が負う必要はないとのキリスト教が本体、依って立つものがある。

4. 仏教とキリスト教の経済倫理における比較

上記の人間本来の倫理として「慈悲」と「愛」は、仏教・キリスト教、東洋思想・西洋思想において、総じて共通点を抱くものであり、実践においていかに生かされているかを既述したが、経済活動において、いかなるものかを概要したい。

1) 仏教—①原始仏教(詳細には、「シンガーラ(Singala)への教え」参照)

原始仏教教団は、インドの諸教団と同様に出家修行者と在家信者から成り立つが、出家者は、全ての財への執着を去り、経済行為に関与しなかった。在家信者の経済倫理として、

- i) 世俗の職業に精励努力する事。正しい業種（耕作・商売・官吏等）と正しくない業種（武器・生物・酒・毒・肉の売買）があり、正しい業種には生産・流通にわたるのが特記され、何れも職業倫理には、慈悲の精神に基づく。「五戒」（別表14）を厳格に守る。
- ii) 利潤の追求が積極的に勧められ、精励に因る財・富の蓄積を奨励した。「収入四分の計」（別表15）が説かれる。利潤の追求では、正直を守る事による信用を得、それが財を得る事と関連し、貸借関係では、道徳を強調し、負債への利子の正当性を認め、貸付けを奨励、経済行為に報恩思想を尊重する。
- iii) 禁欲を勧め、職業に精励、富の積極的蓄積へ、消費・浪費の抑制、みだらな生活を戒め、仏教倫理の根本精神を説く「八正道」（別表16）の「中道」思想による収支バランスのある適切な生活遂行を説く。
- iv) 施与を説く。施与の倫理を強調し、自分のために活用し、他人にも積極的に活用し、財の蓄積は、人々の福祉のために貢献するためと説く。

②大乘仏教：一六波羅蜜（別表17）を主に一

実践倫理として i) 原始仏教と同様に施与の追求が勧められる。ii) 生産・労働には「七福田」があげられ、菩薩も世俗の生産に協力すべしと説かれる。世俗の職業が宗教的意義を持つに至った。「利他行」を強調し、その精神は「自未度先度他」といい、衆生済度の誓願をたてた。経典として、『大般若波羅蜜多經』（600巻）その中に『般若心経』がある。

③主要宗派の経済倫理— i) 浄土教

念仏を説く法然（1133～1212）の浄土宗、親鸞（1173～1262）の浄土真宗に見る経済倫理の特色として、浄土宗では往生を願い、念仏に励み、災難に用心し、「儉約をして家業に励め、家業即念仏」、欲を説き、困窮者・災難者には施与を勧める。仏教は三世に及び万人を教化するものであり、その功德は広大で、回向すれば往生の業になるのが道理である、と説く。

真宗では、節約、堪忍、正直、高利の禁止、財の貪りの禁止、家業の精励等を説く。節約は、儉約し奢侈せねば衣食は足る。吝嗇ではない節約を行い、堪忍をせねばならない。家業において、生業を行い、利益獲得に正直が求められ、高利・貪りが禁止に。正道—正直、公正—による利益を勧める。近江商人の多くは真宗門徒であり、これらを創業者の家訓として、「始末して気張る」精神を生みだし、「日本資本主義の精神」形成の基礎として、今日の伊藤忠商事・丸紅・西川産業・市田・日本生命等の発展に継承される。その職業倫理として、報恩行（別表18）があげられる。「少欲知足にして、身の分際を勘へて、華美をなさず、法華にそむかぬ」が基本であり、「世間の勤めも皆仏法の御用」、「王法仁義も信心の守護なり」と教えられる。その中興の祖・蓮如（1715～1799）は、世俗に精進する事が、仏に対する奉仕であると説く。禁欲・勤勉・節約の倫理を説き、働いて蓄積する事の正当性を仏法の立場から教える。また、御坊を中心とする御坊町を形成、町人町の源流で、商業都市に発展、日本商業資本主義の温床となる。この教えは、M.Weberのプロテスタンティズムと西欧資本主義形成に通ずるものがあり、東洋人には職業を義務とする倫理的性格において欠く面があると主張した事に関していえば、真宗門徒に関する限りその見解は正しくなく、近江商人の大部分が門徒である点でも実証される。職業倫理からも同様の考察ができ、進歩的意義を見出され、有するものが「妙好人」（一般の門徒として篤信者を江戸時代以降現在にも言われる人々）に見られる。職業生活の内に信仰が生かさ

れ、信仰に包まれるものである点—阿弥陀如来の無分別の智慧と慈悲とが日々休みなく我々に注がれる—が強調される。「祈る」とはいわず、「念ずる」のである。

ii) 禅宗

職業倫理の大成は鈴木正三（1579～1655）である。主著『万民徳用』の特色は世法即仏法を展開、「仏法修行は諸の業障を滅尽して、一切の苦を去、此心即士農工商の上に用いて、身心安楽の宝なり」という。現世の職業生活が仏教そのものであるという。「四民日用」にて、武士・農民・職人・商人を個別に門答形式にて、武士は勇猛心・堅固の必要性、農民は農業が仏行、菩薩行、職人は何の事業も皆仏行、自由を、商人は「得利」の心得に正直の道を、万人のために成さねばならないという日本人に働く事から得られる幸福を教えた、いわば、禁欲的プロテスタントイズムの倫理に匹敵する。

2) キリスト教—i) 聖書における経済倫理の源泉

先ず聖書の経済倫理を考えるため、ライバルといわれるギリシャの労働観と比較すれば、古代ギリシャ人は、労働をポノス・ポイエシス・プラクティスの3段階に分けた。「ポノス」は、生存のために生活必需品を獲得する事で、奴隷にやらせた。「ポイエシス」は、人間の能力を発揮して芸術品等を製作する事であるが材料に制約があり、最も人間らしい、「プラクティス」は、自由人の働きで、人間らしく行動する事である。最も象徴されるのは、言論活動によって哲学者が自分の見解を説明し、政治家が市民に向かって説得する行為である。古代ギリシャ人は、物質的獲得に極めて消極的価値しか与えなかった。

その後のプロテスタント信仰によると、働く生活は直接、神の招き（Beruf）に応答する生活であるといわれるが、これは宗教改革者ルターが、聖書のクレーシスを独語 Beruf に訳した事に始まり、Beruf とは独語の職業であるが、それが、招くとの意味で神の招きで隣人愛の「実践の場」になるという事である。

ii) 旧約聖書における経済倫理—富と所有の観念—

その信仰は、神が創造者でありすべてを所有するという信仰である。神の民のアイデンティティは、神と民との契約の中にあり、最初から社会的実存である。その契約は「十戒」（別表10）に示される。「出エジプト記」の前提に、民は賜物を与えられ、神との契約に従って管理する。富を得る力は手段であり、目的は契約に従った生活である。この結果、民は富や財産に積極的な態度を与えられた。「申命記」による神と民の共同体形成のあり方はヘブル的共同体の中の「寄留の異邦人」の位置づけにある。イスラエルの現状の背景としての歴史的には、この「出エジプト記」の経験が典拠となる。旧約聖書は、出エジプトの神がその解放民と契約し、その生活を管理する形態として確立しようとした苦闘史であり、その原因はしたたかなる現実の奥に在る罪の問題である。

iii) 新約聖書における経済倫理—①イエスの時代

旧約聖書にない新たな観念としてイエスの「神の国」の終末論的宣教が入り、イエスを継ぐ弟子達の時代である。所有については、無所有で伝道に励む弟子の姿が描かれが、すべてに富の徹底的放棄を求めず、古い世界への執着を断ち切るように促した。「新しい共同体」の形成による生き方で、M.Weber がいう「世俗的希望」の立場といえよう。イエスは「日雇い労働者等のプロレタリアートや土地のない小作者層でなく、ガリラヤ地方の手工業を営む中産階級」出身であった。譬え話に、大土地所有者、財産管理人、奴隷等の多様な社会層が描かれるが、革命でなく、唯神の国の要求を描写するためである。キリストの

十字架における罪の赦しの愛を中心に新たな価値観による共同体が誕生した。彼の自己理解は「ピリピ人への手紙」(別表1 1)で、「足る事」を心得て、貪欲への警告を発する。正に仏教が説く「少欲知足」に通じるものがある。

②経済活動から見た経済倫理

1) 富と神：一)「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と教え、パンを富(財)、経済とすると、神の言葉は信仰、宗教とする事が出来る。二) 現世に富を積むものでなく、天に宝を持つように勧め、「金持ちが天の国に入るのは難しい。ラクダが針の穴を通る方がまだ易しい」と、富の否定を教える。イエスの富と富める者に対する警戒心は、ユダヤ人の伝統的な考え方に負うところが多い。

三) 神と富とに兼ね仕える事は出来ないという。富には不義が関与し、不正な富を用いても、自分のための友人を作る事を肯定する。友人とはイエスであり信仰である。

2) 利子と貸金：金が利子を生む経済の法則が神の国の法則にも通じる事を述べる。(「マタイによる福音書第二十五章1 4～3 0」(別表1 2)これは「タラントンの譬え」といわれる。人生の意味は神より与えられた自己の才能をいかに神のために働かせるかを述べる。天国は我々が期待するものであり、天国も我々に期待をかける。当時にも今日の銀行に類する制度があり、預金に一定の割合の利子の支払いを知る事が出来る。

3) 仕事：イエスは職人であった。神に仕える事は安息日を知らぬほどに仕事をする事であった。その仕事は業を伝え、「教え」を宣べ伝える事であり、精神的労苦も属する。

二) 仕事は認められなくても無価値でない事を、譬えにて諭す。(『ルカによる福音書』別表1 3) 信仰は信頼という質にあり、神から何物も要求すべきでないと言く。パウロは使徒としての過酷な労苦も他の誰よりも多くの苦痛を身に背負った。

5. 最後に

上記1と2において、「愛」と「慈悲」とは本質的に差異がないと考えられる。何故ならば、キリスト教の隣人愛が「無我」の愛である事を示し、「怨親平等の愛」であり、それが神の完全さと等しくなる道と示される。それは人間的な差別愛を否定し、神的な無差別愛に入る事を命じるものである。キリスト教の愛が無我を根源とする点で、空・無我の境地に発する慈悲と本質を同じくする。人間にとって最も大切なものは人間の内にあるという認識に基づくと、内なる心を清める、純粋な信仰が強調され、具体的には、愛を重んじる慈愛の行いを尊ぶ事になる。

3と4において、経済倫理(Economic ethics)について、両者の特色を示した。M.Weberは宗教の経済倫理を「宗教の心理的な事象的諸問題の内に基底を持つ行為への実践的機動力」という。両教の共通項目として、倫理では、i) 禁欲・節約・少欲知足 ii) 勤勉、精励、iii) 正直等、職業倫理、終結といえる施与(自発的・義務)があり、相違項目として、利子の問題(旧約聖書は禁止、仏教は思想になく)職業特に商人の見方が指摘される。

参考文献

・キリスト教関連

- 青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター編
『キリスト教と現代』 1997年 日本実業出版社
- 浅野 順一著 『キリスト教概論』 1966年 創文社
- 国際クリスチャン教授協会編
『宗教と新しい経済倫理』 1990年 星雲社
- 曾野 綾子著 『心に迫るパウロの言葉』 1989年 海竜社
- 日本聖書刊行会『聖書』新改訳 1982年 いのちのことば社
- ※『聖書』(HOLYBIBLE)日本語版は、逐次改訳を重ねており、版により、訳は異なる事に留意されたい。
- 山本 和著 『現代とプロテスタント倫理』 1960年 創文社
- J.Viner 著 『キリスト教と経済思想』 1980年 有斐閣
- M.Weber 著 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 1989年 岩波書店

・仏教関連

- 宇井 伯壽著 『仏教汎論』 1963年 岩波書店
- 拙著 「仏教倫理と経済的合理主義精神に関する一考察」
(『仏教経済研究』29号 2000年) 駒澤大学
- 拙著 「仏教の倫理と合理的生活態度への一考察について」
(『仏教経済研究』30号 2002年) 駒澤大学
- 中村 元著 『慈悲』 1956年 平楽寺書店
- 中村 元著 『東洋のこころ』 1985年 東京書籍
- 東本願寺編 『真宗聖典』 1999年 東本願寺出版部
- 寶角 正三郎著 『仏教の倫理と経済』 1994年 四恩社

・共通

- 三枝 充恵著 『比較思想論集』全3巻 1981～1983年 春秋社
- 芹川 博通著 『経済の倫理—宗教にみる比較文化論』 1994年 大修館書店
- 竹内 靖雄著 『経済倫理学の勧め』 1993年 岩波書店
- 中村 元著 『宗教と社会倫理』 1959年 岩波書店
- 増谷 文雄著 『仏教とキリスト教の比較研究』 1973年 筑摩書房
- K.Samuelsson 著 『経済と宗教』 1971年 ミネルヴァ書房
- M.Weber 著 『宗教社会学論選』 1972年 みすず書房